

月つきに閉とじこめられたなまけも者の



まあ、きいてくださいな。
うちの子ときたら、とんでもないなまけ者。
「水を汲んできておくれ」と、たのんでも、返事一つ、しません。
ごろごろと、炬燵たで寝そべっているばかり。
何度いっても、どうしても行かないので、
やれやれ、と思っっていると、
息子が、むっくり、起きあがりました。
おや、ようやくその気になってくれたのか、と思ったら……



息子は、腰からマキリを抜くと、グサリと炉ぶちに突き刺しました。
そして、にくにくしげに、こうつぶやいたのです。
「まったく、炉ぶちは、のんきなもんだ。
ひがな一日ぬくぬくと、火に当たつてれば、いいんだからな。
ほんとに、うらやましいもんだ」

マキリこがたな小刀

それから、息子はいきなり立ちあがり、マキリを握った手を大きく振りあげました。そして、その手を振りおろし、グサリと柱に突き刺したのです。そして、吐きすてるように、いいました。「まったく、柱は、いい気なもんだ。突ったっただけで、いいんだからな。つくづく、うらやましいもんだ」



そうして、やっと、手桶とひしゃくを手にとったかと思うと、わたしの顔もみずに、ぶいと外に出ていったのです。

ところが、いくら待つても、もどつてきません。
日も、すっかり暮れてしまいました。
わたしも、さすがに気になって、探しに出かけました。
いつもの水汲み場にいつても、あの子の姿は見えません。



コタンをくまなく探しましたが、だれも行方を知りませんでした。
川にでも落ちたのかと、心配でなりません。
あの子の姿を探しながら、川に沿つてくだっていきました。



すると、水がきらきら光りました。
見れば、ウグイたちが、川をのぼってくる所でした。
「うちの子を見ませんでしたか？」と、ウグイの大将にたずねました。
「ふん、人間め。おれたちは、毎年毎年、アイヌモシリを訪れるが、
『尻尾のつけ根が骨だらけの魚め！』と、悪口をいわれるばかり。
ちつとも、ありがたがらないじゃないか。
おまえの息子の行方は、知っているけど、教えてなんかやるもんか」
ウグイたちは、川をのぼっていつてしまいました。

アイヌモシリ 人間の世界



また、水がきらきらと光りました。

こんどは、サクラマスたちが、川をのぼってくるどころでした。

「うちの子を見ませんでしたか？」と、サクラマスの大将にたずねました。

「ふん、人間め。おれたちは、毎年毎年、アイヌモシリを訪れるが、

『皮の下がべとべとした魚め！』と、悪口をいわれるばかり。

ちつとも、ありがたがらないじゃないか。

それだけじゃない。

おまえたちは、おれたちの頭を、古くて汚いたたき棒でたたいて殺す。

きちんと、あたりしくてきれいな棒で送ってくれなくちゃ、

生まれかわることもできない。

おまえの息子の行方は、知っているけど、教えてなんかやるもんか」

サクラマスたちも、川をのぼっていつてしまいました。

またしても、水がきらきらと光りました。
こんどは、イトウたちが、
川をのぼってくるところでした。
「うちの子を見ませんでしたか？」
と、イトウの大將にたずねました。
「ふん、人間め。
おれたちは、毎年毎年、
アイヌモシリを訪れるが、
『口の大きなみつともない魚め！』
と、悪口をいわれるばかり。
ちつとも、ありがたがらないじゃないか。
おまえの息子の行方は、知っているけど、
教えてなんかやるもんか」
イトウたちも、
川をのぼっていつてしまいました。





さらにまた、水がきらきらと光りました。

こんどは、サケたちが、川をのぼってくるところでした。

「うちの子を見ませんでしたか？」と、サケの大将にたずねました。

「そうか、そうか。わたしたちが、毎年毎年、アイヌモシリを訪れると、

あなたたちは『すばらしい魚！』と、ほめそやしてくれる。

まあたらしい、きれいなたたき棒で送ってくれて、

草を敷いて、きちんと並べ、ていねいに扱ってくれる。

おかげで、わたしたちは気持ちよく生まれかわり、

またこのアイヌモシリに来たくなって、なんどでも戻ってくるのだ。

ありがたく思っているので、あなたの息子さんの行方を教えてさしあげましょう」

「それは、ありがとうございます」

わたしは、ほつとして、涙が出そうになりました。

あんななまけ者でも、わたしのかわいい息子なのです。

ところが、サケはこんなことをいいました。



「あなたの息子さんは、あんまりひどいなまけ者です。水汲みさえ、いやがるありさま。そのうえ、炬ぶちをマキリで突き刺しました。炬ぶちのカムイは、心根のよくない者ですから、カムイたちに、それをいつけてしまったのです。カムイたちは、怒って、こういいました。『そんなに働くのが嫌いなのか。それなら、望みどおり、なにもしないでいいようにしてやろう』そして、あなたの息子さんを、お月さまへ連れて行ってしまったのです。ほら、ごらんなさい」

そういわれて、月を見あげると、どうでしょう。あの子が、月のなかでひしゃくを片手に、立っているではありませんか。『息子さんは、望みのとおり、この先ずっと、柱のように立ちつづけるのです』

そういって、サケたちは、川をのぼって行ってしまいました。



「かあさん、かあさん」と、月のなかから、声が聞こえてきました。
「ああ、坊や、わたしの坊や！」

「ああ、かあさん、ごめんよ。」

おれが、あんまりひどいなまけ者だったから、カムイたちは、いましめのために、おれを、月のなかに閉じこめてしまったんだよ。もう二度と、かあさんのところへ戻れることは、できないんだ」

あの子は、月のなかで、おいおい泣きました。

涙は月からあふれだし、雨のように地上に降りそそぎました。

あの子は、しゃくりあげながら、いいました。

「かあさん、ひとつだけ、お願いがあるんだ。」

これから生まれてくる子どもたちに、教えてやってほしいんだ。

なまけちゃいけないよ、ものぐさをしてはいけないよ、と。

ものぐさが過ぎると、おれのようなになっちゃうんだから、と」

「わかった。よおくわかったよ。きつと教えるよ」

「かあさん。山で、木の実や山菜がたくさん採れる年には、

おれの持っているひしゃくが、くつきりみえるようにするからね。

きつと、おれを見あげておくれ」

「ああ、わかったよ。だいじなわが子のことを、忘れたりするものか」

そんなわけで、わたしの息子^{むすこ}は、
いまもああやって、月^{つき}のなかに立^たっているのです。
ああ、なんとかなしく、さみしいことでしょう。

ですから、子^こどもたち、けっして、ものぐさをしては、いけませんよ。

と、息^{むすこ}子を月^{つき}に閉^とじこめられてしまったおかあさんが、涙^{なみだ}ながらに語^{かた}りました。

